

側方歯群交換期の上顎前突を機能的顎矯正装置プレオルソ・タイプIで改善した2例

○安藤 匡子

福岡市 あんどう歯科小児歯科

【目的】 大塚らは従来の機能的顎矯正装置に改良を加え、熱可塑性を有するシリコン由来の材料を用いた装置「プレオルソ」(株フォレストワン)を開発し、その有効性を報告している。今回演者は、「プレオルソ タイプI」を用いて側方歯群交換期に上顎前突を比較的短期間に良好な状態に改善したので報告する。

【症例1】 患児：12歳5か月 女子 主訴：上の歯が出ている 口腔内所見：Hellmanの歯牙年齢ⅢB期後期で、臼歯部関係アングルI級、overjet +6.6mm, overbite +4.5mm

治療および経過：2014.4.19 資料採得および分析。2014.4.28プレオルソ タイプI装着開始。その後約4週間毎に調整を行った。2014.11.18.には、overjet +3.3mm, overbite +3.5mmへ、セファロ分析ではinterincisal U-1 to SN Pl. 及びU-1 to FH Pl.の変化が著明であった。

【症例2】 患児：10歳7か月 女子 主訴：歯がでこぼこで出っ歯が気になる。

口腔内所見：Hellmanの歯牙年齢ⅢB期で、臼歯部関係アングルI級、overjet +6.0mm, overbite +4.9mm治療および経過：2014.7.18 資料採得および分析。2014.7.23プレオルソ タイプI装着開始。その後約4週間毎に調整を行った。2015.1.16.には、overjet +3.2mm, overbite +3.8mmへ、セファロ分析では、interincisal SNA, SNB, U1 to SN Pl.の変化が認められた。

【考察および結論】 両症例とも上下歯列弓の形態がV字型よりU字型に変化し、上顎犬歯間幅径は、症例1では、6か月で2.1mm、症例2では、6か月で1.4mmの増加が認められ、各年齢の平均変化率よりかなり大きな変化をみとめた。「プレオルソ」は舌や口唇へ働き、反対咬合の改善効果を早めると考えられ、主にそのような症例の報告がなされている。

今回、上顎前突症例にもその有効性が確認できた。

多数の硬組織形成を認めた集合性歯牙腫の1例

○林 芳裕

(福岡県・はやし小児歯科)

【緒言】

集合性歯牙腫は、小児歯科臨床においてしばしば遭遇する硬組織形成を伴う嚢胞様過誤腫である。多くの場合、無痛性に経過し、エックス線撮影において発見されることが多い。

今回、著者は6歳男児に認められた、非常に多数の歯牙様硬組織を含む集合性歯牙腫の1例を経験したので報告する。

【症例および所見】

6歳0か月の男児、う蝕診査および処置を希望して来院した。多数歯にわたってう蝕傾向が認められたため、パノラマX線診査を実施したところ、右下第1および第2乳臼歯根端部に境界明瞭で多数の硬組織を含む嚢胞様構造物が認められた。口腔内所見では腫脹、膨隆などは認められない。なお全身的にも異常は認められない。

【処置】

嚢胞様構造物は拇指頭大であり、他組織への侵襲等を考慮し、口腔外科での摘出が適切と判断し、九州医療センター歯科口腔外科に依頼した。摘出時には第2小臼歯歯胚が認められなかったことから、第2乳臼歯を保存し、嚢胞様構造物の全摘出が行われた。

【摘出物所見および病理診断】

摘出物は厚い嚢胞壁に被覆されており、内部には大小さまざまな大きさの103個もの歯牙様硬組織が含まれていた。病理検査では悪性的な所見は認められず、歯原性良性腫瘍の集合性歯牙腫と診断された。

【経過】

現在、摘出後1年半を経過したが、再発などの異常所見は認められない。なお、摘出時に確認できなかった第2小臼歯の歯冠形成が認められ、経過は良好である。

【考察】

集合性歯牙腫は、無痛・無症状に経過し、数個から数十個の硬組織形成を認めるとする報告が多い。本症例では103個もの硬組織形成を認めたが、口腔内所見では腫脹や膨隆などの異常は認められなかった。しかしながら、永久歯胚の先天性欠損や位置異常をきたすなど、後継永久歯列に影響を及ぼすこともあり、小児歯科臨床においては早期発見が重要な病変であると考えられた。